

## 誰とも知らぬ人へ（巻頭言に代えて）

江川 徹

北里大学教職課程センター センター長

北里大学教職課程センター教育研究6号をお届けします。

改めてご挨拶申し上げます。副学長の江川です。2020年7月より、センター長を務めております。私自身は一般教育部の自然科学教育センターに所属しており、化学が専門です。一般に自然科学系においては、学会と論文誌が、研究発表のいわば「主戦場」で、本誌のような大学の紀要はあまり発表の場としては選ばれません。私自身も今までに所属した大学の紀要に何かを書く機会はありませんでした。そこで今回は、私自身ではなく私の祖父が大学の紀要に残した文章にまつわるお話を披露させていただきます。

母方の祖父は19世紀の終わり近くに埼玉県北部の富裕な農家に三男として生まれ、旧制高校、帝国大学の文学部を経て旧制佐賀高校に職を得ました。終戦の年に旧制山形高校に移り、そのままその地で終戦を迎えました。戦後になって山形高校は師範学校などを吸収する形で山形大学となりましたが、それに伴い、祖父も山形大学文理学部の初代教授の一人となり、定年までそこで国文学の教授として勤めました。

祖父の生涯は研究者と言うより教師と呼ぶにふさわしいものだったようで、残した研究業績は極めてわずかです。そのわずかな業績の一つが、1950年の山形大学紀要に載せた「埼玉縣熊谷附近の方言に遺る二三の古語」<sup>1)</sup>と題する短い論文です。自身の出身地周辺の方言に残る古語の痕跡を彙集した地味な研究で、恐らくほとんど誰にも注目されることがなかったと思われます。

所がそれから数十年後、経緯は不明ですが、この論文が、熊谷附近にお住まいの在野の方言研究家の目に留まりました。その方は地元の公民館などで方言に関する一般市民向けの講演などをされている人ですが、祖父の論文にいたく感銘を受けられたようで、公民館の機関紙で、祖父について次のように言及してくださいました。

「会って見たかった人がいます。（中略）昭和25年3月発行の『山形大学紀要（人文科学）第一号』に「埼玉県熊谷附近の方言に遺る二三の古語」という論文を載せた文理学部国語国文学研究室の田島福重さんのことです。（中略）当時50歳とすれば116歳です。あの世でも会いたいものです。」<sup>2)</sup>

このとき、祖父はとうの昔に世を去っていました。

この方はその後、「埼玉のことば 県北版」と題する書籍を出版されました。<sup>3)</sup> 文字通り、

埼玉県北部の方言を集めた、五百余頁にも達する大変な労作ですが、参考文献の筆頭に、祖父のこの紀要論文を挙げて下さっています。この方にとって、祖父の残した論文がいささかの刺激になったということです。

論文誌と紀要を合わせると、日々世に出る論文の数は天文学的なものです。「平均すると、1論文あたりの読者数は1人強、すなわち書いた本人しか読まない」などと揶揄する言葉を目にしたこともあります。しかしこのように、時を超え、未知の人に思いもかけない影響を与えるということもあり得ます。そう思って、私たちは日々、ささやかな仕事を重ね、未来の誰とも知らぬ人にそれを残そうとしています。本号掲載の論文にも、そのような出会いがあることを願っています。

（参考文献）

- 1) 「埼玉縣熊谷附近の方言に遺る二三の古語」田島福重 山形大學紀要（人文科學）、1, 103 (1950) .
- 2) 「くまがや風土記 7 奈良時代へと続く散歩道」篠田勝夫 熊谷市公連だより、20 (2015) .  
<https://www.city.kumagaya.lg.jp/about/soshiki/kyoiku/kumagayatyuokominkan/index.files/fudoki7.pdf>
- 3) 「埼玉のことば 県北版」篠田勝夫 さきたま出版会 (2004) . ISBN 978-4878913686